

---

# ダンシングチェーンソー

弥招 栄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ダンシングチェーンスー

### 【Nコード】

N1708D

### 【作者名】

弥招 栄

### 【あらすじ】

その年、日本列島を未曾有の規模の台風が襲った。山間にひっそりとたたずむその村も災禍に見舞われた。この作品は、お題小説企画「劇場『すばと』」からタイトルを借りて書いたものです。興味のある方は、下のリンクから、専用サイトへどうぞ。

## （前書き）

この作品は、お題小説企画「劇場『すぽと』」に参加しています。「すぽと」で検索していただくと、関連作品を読むことができます。

ではどうぞ、お楽しみくださいませ。

「親父ーっ！ かあさーんっ！ 孝太ーっ！」  
まだ傷跡の痛々しい山肌に、男の悲痛な叫びがこだました。

その年、日本列島を直撃した大型台風は、各地に爪あとを残して去っていった。

この寂れた山村も被害を受けた。崩れた山肌は土石流となって民家を襲い、川を埋め、道路を遮断した。

最も奥まった場所に住むその一家も例外ではなかった。夫婦と息子が一人、林業を生業とする彼らが住んでいた家も。

嵐が過ぎ去り、駆けつけた村人たちが見たものは、土石流の下にわずかに覗く、家の残骸だけだった。

それから一週間後、ようやく町とを結ぶ県道がつながり、復興の槌音が響き始める。

しかし、今始めて現実を突きつけられた男の耳に、そんな音は届いてはいない。

「陽一。泣いていても始まらん。しっかりしろ」

「お前になにがわかるっ！」

陽一は肩に乘せられた幼馴染の手を振り払った。

林業の傍ら、ログハウズビルダーとしても全国的に名を知られる陽一は、その日雑誌の企画のため村にいなかった。もし俺が残って入れば。

しかし、激情に任せてにらみつけた幼馴染の目は、赤くはれていった。

「わかるさ。俺も家族を流されたからな」

消防団の一員だった彼は、危険を承知で嵐の中を走り回り、そのおかげで、ただ一人難を逃れた。

一番守らなければならなかった家族を守れなかった。すぐ近くにいたのに……

その悔恨は、陽一のそれすら超えるだろう。

「賢治、何人死んだ？」

一瞬の激情が過ぎ去り、陽一は幼馴染にぼそりと尋ねた。

「二十七人だ」

賢治は、一人ひとりの名を上げてゆく。狭い山村だ。名を聞くだけで、日に焼け、額に汗を浮かべた彼らの笑顔を思い浮かべることができる。

「お堂も流されたのか？」

「ああ、羅漢様も一切合財な」

「そうか。なあ、チェーンソーを貸してくれないか」

唐突な陽一の頼みに、賢治は聞き返す。

「なにをするつもりだ？」

「お堂の百羅漢は、この村の誇りだったからな。俺みたいな奴が彫ったものでも、ないよりましだろう」

賢治は、陽一に会ったときに伝えようと思っていた決意を飲み込んだ。

材木の集積場も流され、植林したばかりの苗木もみな持っていかれた。この村はもう終わりだ。家族もいない。だったら、村を捨てよう。

しかし、ログハウスビルダーとして、村を出ても生きてゆくことのできる陽一でさえ、村のために何かをしようとしている。

「お前のチェーンソーアートは最高だからな。出来上がればみんな喜ぶさ」

賢治は、復興の手の届いていない道をここまでつれてきてくれたジムニーの荷台からチェーンソーを取り出すと、燃料タンクと一緒に

に陽一の足元に置いた。

「ここでやるのか？」

「ああ」

「そうか。後で飯を持ってきてやるよ」

「知らない。二十七の羅漢像を彫り上げるまでは」

「そうか……」

陽一の節くれだった腕がチェーンソーをつかむのを横目に、賢治はジムニーに乗り込んだ。

復興までの道のりは、まだ遠い。

その夜、月に照らされた山間の村に、一晚中チェーンソーのエンジン音が響き続けた。

それはまるで、山々が泣いているかのようだった……

翌朝、わずかな、しかし泥のような眠りから目覚めた賢治は、その音が途絶えていることに気づいて、急いで陽一のもとへと向かった。

あちこちを落石と土砂にふさがれ、はかのゆかぬ道のりに舌打ちをしながら、ジムニーを操る。

そしてようやくその場所にたどり着いた賢治を迎えたのは、ずらりと並び、高さ一メートルほどの羅漢像たちだった。

車から降りた彼は、それらを一体一体見つめながら歩く。

細谷さん……幸田のばあさん……川西んちのたあ坊……

見覚えのある、だけど今は思い出の中にしか残っていない表情。仕草。

お、おふくろ……宏子っ！

賢治は、その二体の前に跪いた。老婆と女の像は、まるで嵐なんかなかったように、少しおどけた様子で笑っていた。

そのとき彼の耳を、エンジン音がつんざいた。二つの像に両手を伸ばしたまま、賢治は振り返る。

そこには、三本の丸太を前に疲れ果て、消耗しきった様子の陽一が、チェーンソーを抱えて立っていた。

しかし、それでも重いチェーンソーが動き出す。回転する刃が丸太に当たって、木屑を飛ばす。

飛び散った木屑は朝日に照らされて、きらきらと舞い落ちる。そして陽一はその中で、何の迷いもなく丸太を削り続けていた。

少しずつ、丸い頭が、肩が、伸ばされた腕が現れてくる。

三つの丸太から、同時に三体の羅漢像が姿を現し始める。

踊っているようだ。

舞い散る光の中、チェーンソーは歌いながら、上へ、下へ。そしてくるりと回って。

賢治は両手に愛する家族を抱いたまま、時間を忘れてチェーンソーのダンスに見とれていた。そして

踊りつかれたチェーンソーが、歌をやめたとき。

へたり込んだ陽一を、懐かしい家族の笑顔が取り囲んでいた。

( f i n )

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1708d/>

---

ダンシングチェーンソー

2010年10月19日20時50分発行